opera
Osaka Prefecture University
Education and Research Archives
大阪府立大学 学術情報リポジトリ

Title	ブレーメンのアダム「北欧諸島誌」（下）
Author(s)	塚田, 秀雄
Editor(s)	
Citation	人文学論集. 1993, 11, p.59-74
Issue Date	1993-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10466/8823
Rights	

http://repository.osakafu-u.ac.jp/dspace/

ブレーメンのアダム「北欧諸島誌」[1]（下）

塚田秀雄

二一章

デンマークの島々を過ぎると、別の世界が眼前に広がる。すなわちスイオネールの土地とノルドランドであり、北方における二つの大きな国をなすが、我が国民にはほとんど知られていない。博識のデンマーク王が、私に、ノルドラントは一か月では通過できないし、スイオネールの国は二か月で辛うじて通過できると語った。彼は「自分が一二才の時、一度、ヤコブ王に従ってこれらの国で従軍しているから、このことは自分の口で言える。これらの国は共に非常に高い山に囲まれており、特に、ノルドラントはその山でスイオネールの国を取り囲んでいる」と言った。昔の著者であるソリヌスとオロシウスも、スイオネールの国について、沈黙を守っていない。彼らはスウェービーがゲルマーニアの大部分に住み、この山岳地方はリペアの山地にまで達すると言っている。そこにはまたエルベ川が流れるがこれはルカヌスの命名と思われる。エルベ川は上記の山地に発し、イェータの諸部族の真ん中を大洋まで流れる。従って、この川はイェータエルブとも呼ばれる。スイオネールの土は極めて肥沃で土地は穀物と蜂蜜に富んでいる。この土地は家畜の飼育に関しては他の国を凌駕する上、川と森は都合の好い位置にあり、国中どこにでも外国の品物が満ちている。それ故、スイオネールはいかなる点でも不足に悩むことはないと主張し得るが、それにも関わらず、我々が愛し崇び、誇りとする心を彼らは持たない。全ての空なる虚栄のもとになる金、銀、優れた馬、ビーバーやテンの毛皮などそれに対する我々の渇望によって我々に狂気をもたらす品々を、彼らは無価値と考えている。女子と同衾することに関してのみは、彼らの節度がまるでない。全てその力に応じて、彼らは同時に二

人、三人またそれ以上の妻を持つ。富者や貴族は余りに多くの妻を持つために数えることすらできない。彼らはこのような関係で誕生した息子も嫡出子と考える。しかし、他人の妻を誘惑した者、処女を強姦した者、隣人の資産を奪った者、隣人に暴力を振るった者は死罪となる。ほとんど全ての極北の住人はその客人の歓待でよく知られており、この点でスィオネールは特に目立っている。彼らは通り掛かりの旅人に部屋を供するのを拒むことを最大の恥と考える。そして、誰が客を受け入れる名誉を得るかと彼ら同士で競うのである。受け入れた者は客に対し、適切なあらゆる親切を示し、客がそこに留まりたいと思う期間、客を自分の友人の家へ次々に連れてゆく。これは彼らの習慣の内、美しい傾向である。もし布教する者が高潔、賢明かつその責務にふさわしければ、彼らは真の信仰を説く者を深い愛情で受け入れる。彼らの間でワルプと呼ばれる彼らの公開の集会に司教が参加することを拒まない。その場でしばしば彼らはキリストとキリスト教についての話に耳を傾ける。そして、イエス・キリストではなく自分の宗教を求めて魔法を説く者が救われるべき者を誘惑しさえしなければ、おそらくは彼らは説教によって容易に我らが信仰を受け入れるように説得され得るであろう。

sk 128　タキツスもスウェーデン人についてスィオネールの語を当てている。

sk 129　パウルス　ディアコヌスはロンゴバルド史で北欧人の多産とスクリードフィンナの土地の海岸で眠る七人の男について語っている。

sk 130　デンマーク人、スィオネール人とノルウェー人ならびにその他のスキチア族はローマ人によってヒペルボレールと呼ばれており、マルチアヌスは彼らを非常に褒めている。

sk 131　イェータ川はイェータラントとノルウェー人を隔てている。この川の大きさはザクセンのエルベ川に比肩されるもので、その名もここからきている。

二二章

スィオネールの部族は多く、強さと武器の使い方でめざましいばかりでなく、騎馬戦と海戦の双方に優れている。そのため彼らはその力によって他の北方諸族に君臨するものであるかに見える。由緒ある一族から王を戴くが、王の力は民衆の意思による。民衆は時に王の意思に従わないので、王は、彼の決定がより正しいと認められない限り、全員が一致して決定したことを承認しなければならない。国内では彼らは平等であることを喜ぶが、一旦戦いに赴く時は、王または王が他の者よりも能力があると認めた者に服従する。もし戦いの際に何か困難に遭遇すれば、彼らは彼らが信仰する多く

の神の一人を呼んで助けを求める。勝利の後は、彼はこの神を特に信仰し、他の神々よりも尊重する。現在では、彼らは全員の決定により、キリスト教の神を他の全ての神よりも強いと説明する。他の神はしばしば彼らを騙すのに対し、キリスト教の神は困難の時の避難所のようにいつでも彼らを助けてくれる、と彼らは言う。

sk 133　これら野蛮人は全ての私的な事柄をくじびきで決定する。そのほか、公的な事柄に係わる場合は、聖アンスガル伝に書かれているように神々のお告げに従う。

二三章

スウェーデンの諸族の内、西イェートと呼ばれるイェート族が我々にもっとも近く住んでいる。東イェート族もいる。ヴェステルイェートランドはデンマークのスコーネと境を接する。そこから七日でイェートの大きい町スカーラに達する。そこから、エステルイェートランドがバルト海に沿って、ビルカまで広がっている。イェート人の最初の司教はチュルゴトであり、二番目のゴットスカルクは故国に留まり、労働より怠惰を好んだ点を除けば、賢明で良い人物として称揚された。我が大司教は第三の司教として真に優れた人物であるアーダルヴァルト・デンエルドレを任命した。後に彼がこの国外の民族の地に着任した時、彼は教え通りに生活した。清らかな生活とよき教えによって彼は多くの異教徒をキリストの教えに導いたと言われる。彼はまた奇跡と秘法によってよく知られるようになった。野蛮な人々の頼みに応えて、彼は凶作に際して雨を降らせたり晴天にしたりした。その他、今日でも説教者に頼んでしてもらうようなことを行った。この記憶せらるべき人物はイェートランドに留まって熱心に主イエスの名を全ての人に説いたのである。キリストのために喜んで耐えた多くの苦しい戦いの後、彼はその勝利の刻まれた肉体を土に委ね、彼の魂は月桂冠を戴いて天に昇った。その後任として、大司教はこの地方にアキリヌスを任命したが、彼は大きな肉体以外には司教の地位に値するものを示し得なかった。彼は肉の快楽を愛したので、死ぬまでケルンで贅沢な暮らしを楽しんだ。一方、イェート人は彼を迎える使者を送ったが無駄であった。

sk 135　デンマークとイングランドの司教たちがこれらの前にすでにスウェーデンで布教していたが、チュルゴーは特別にスカーラを司教座としてイェータランドに任命された。アーダルヴァルトもハラルド王に招かれてノルウェーを訪れ、その慈悲の心と秘法の故に敬意をもって迎えられた。彼がこの地を離れるに際して、多額の金銭を王から与えられたので、司教は直ちに三〇〇人の囚人の自由を買取ることができた。

二四章

ノルトラントとスイオネールの土地との間には、ヴェルムラント人、フィンヴェド人その他の部族が住んでいる。現在では彼らは全てキリスト教徒でスカーラ教会に属する。ノルトラントとスイオネールの土地の境界地帯の最北部では、スクリードフィン人が住み、野生の獣よりも速く走るといわれる。彼らの大きな町はヘルシングラントと呼ばれ、大司教はその最初の司教としてステンフィを選び、名前を換えてシメオンと呼んだ。これまでに挙げた他に、無数のスウェーデン系の部族がいるが、イェート、ヴェルムラントとスクリードフィンの一部がキリスト教に改宗したことを知るのみである。

sk 137 ヘルシングラントはスクリードフィン人の土地で、リペアと呼ばれる高山地方に位置し万年雪がある。そこでは、人間は寒さのために頑健になり、屋根のある家に住む事を好まない。野獣の肉を食料とし、獣皮を衣服とする。極北の山地に住む獣の他にそこではグリフィンも現れると言われる。

二五章

ここで、スイオネールの土地すなわちスヴェリェについて短く叙述してみよう。これは西部ではイェート族を包含しスカラの町を含む。北部では、ヴェルムラント人、スクリードフィン人がおり、ヘルシングラントの支配を受ける。南部では既述の通り、バルト海がその全長に沿っている。大きな町シグチューナがある。東方ではこの土地はリペア山地と境を接し、広大な不毛地と大量の積雪があり、巨人の集団がいてそれ以上の前進を阻む。アマゾネール、犬頭人、額に一眼を持つキュクロープ、更に、ソリヌスがヒマントポーデルと呼んだ一本足で走る生き物や人肉を食べるのを好むものがいる。そのため、人はこの土地を避け、これについて口をつぐむのも当然である。私がいつも感謝の念で想い起こすデンマークの王は、体は小さいが強い力と敏捷性のためにスウェーデン人が抵抗できない連中が山岳地方から平野部へ下りてくることがよくあると語ってくれた。彼らがどこから来るかは確かでない。彼らは時には年に一度、時には三年に一度、全く突然に出現するとこの王は語った。もし全力をふるって彼らを阻止しなければ、彼らはその地方全体を掠奪して再び立ち去る。私が紙数の関係で省略したことを、彼らはまだ数多く語っている。目撃証人自身がそれについて語るのがよいだろう。ここでは、スイオネール族の異教信仰について少し語ることにしよう。

二六章

この民族はシグチューナの町から遠くない所にウプサラと呼ばれる有名な寺院を持っている。この寺院は隅々まで黄金で飾られ、人々は三つの神像を崇拝する。その内最強のトール神は広間の中央に神座を有し、その両側にォーデンとフレイが座す。これらの神はつぎのような特徴があると言われる。トールは大気を支配し雷鳴、稲妻、風雨、日照と収穫の神であると言われる。ォーデンとは怒りであり、戦いの神で人に敵と戦う力を与えるという。第三のフレイは死者に平和と喜びを贈る。フレイの像には、力強い、勃起した男根が備えられている。ォーデンは我々のマルスと同様、武装した戦士をあらわすが、トールはこれに対し、笏を持っていることから、我々のジュピターのごときものと考えられる。彼らはまた神になった人間をも崇拝し、その大きな功績に対し、不死をもって報いる。聖アンスガルの伝記中に、彼らがエーリク王をそのように扱っていることが記されている。

sk 138　この寺院の近くに大きい木が立っており、枝を広げ、夏冬を問わずいつも緑である。この木の種類は誰も知らない。そこには、また一つの泉があって、異教徒はここに犠牲を捧げる習慣がある。生きた人間もそこに投じるのである。この犠牲が戻らなかったら人々の望みがかなえられる。

sk 139　黄金の鎖が寺院を取り巻いている。鎖は建物の屋根にかかり、平らな土地にある寺院の領域自体が劇場のようにそのまわりに山をもつので、遠くからやってくる者にその輝きが達する。

二七章

彼らは全ての神を僧たちに割り当て、僧は民衆の血を捧げる。もし悪疫や飢饉の脅威がある時はトールの像に、戦争が勃発すればォーデンに、結婚のお祝いにはフレイに犠牲を捧げる。その他に、九年に一度、全スィオネール地方から民衆が参加して、ウプサラで全体の祝祭を催す。だれもこの祝祭に欠席する事を許されない。王と部族、全てが贈り物をウプサラへ送り、既にキリスト教を受け入れた者はこの儀式参加を免除されるために金を払わねばならない。これは他の罰よりもいくらか厳しいものである。犠牲の儀式は次のように行われる。各生き物から雄九体が供され、その血で神をなだめるのである。体は寺院の近くの木に懸けられる。この木は異教徒にとって非常に神聖なものとされ、各々の木は供された犠牲の体の死と腐敗の結果、神的な力を持つと考えられる。人間の他に、犬と馬が懸けられる。あるキリスト教徒が私に語ったところによれば、彼は七二の遺体が互い違いにそこに懸けられたのをみたことがあると

いう。その他、このような犠牲を捧げる儀式に普通のことであるが、種々の歌が歌われる。この歌は大切なもので、それ故必ず秘密にされなければならない。

sk 140　近年、スィオネールの非常に信仰厚い王アーヌントが偶像に対して民衆が犠牲を捧げることを否定した際、彼はその国から追放され喜んで財産を放棄したので、イエスの名のためには不名誉に耐えるに価するとみられたという。

sk 141　九日間にわたってお祭りが祝われ、供犠が行われた。九日間で犠牲に供される生き物は七二になるように、毎日、動物の他に一人ずつ犠牲が捧げられた。この供犠は冬至に行われた。

二八章

この国では最近その注目すべき事の性質のゆえに広く語られるようになった出来事が起こり、大司教も知るところとなった。ウプサラの偶像に仕える僧の一人が、神がこれを救えないままに盲目となった。この賢い男が、これらの偶像の迷信的な崇拝によってキリスト教の全能の神を冒瀆したから自分の不運な失明は偶像崇拝のせいだとした時、その同じ夜に大層美しい婦人が彼の眼前に現れて、彼女の息子を信ずる気持ちがあるか否かを訊ねて、もし彼がそれまで崇拝していた神を捨てさるならば、再び視覚を得るであろうと言ったという。彼にとっては再び眼が見えるようになるならば、これまでの神を放棄してもいかなる代償も難しいとは思われなかったので、喜んで彼女が云ったようにすると約束した。これに対し、処女は、「あまりに多くの無実の血が注がれたこの場所が、私の名誉にかけて清められるから、汝は安心してよい。我が息子キリストの名においていうが、そのためには、汝に少しでも我々を疑う心があってはならない。汝の眼に光を受けよ」と答えた。眼が見えるようになるや直ちに、彼は厚い信仰の持ち主となり、地方を限無く巡って、異教徒をして容易に真実について納得させ、盲目であった彼を眼が見えるようにした神への信仰に至らしめることができた。

二九章

このような奇跡に促されて、我が大司教は、汝の眼を挙げて畑が収穫に向けて白くなりしを見よと告げる声に従った。彼はこの土地にブレーメンの大教会からアーダルヴァルトデンユングレを任命した。この者はその知識と正直な性格で知られた人物である。有名なステンキル王からの使者の協力を得て、彼はウプサラから僅か一日の距離にあるシグチューナに司教座を創設した。シグチューナには次のようにして達する。デンマーク人のスコーネからシグチューナまたは互いに隣り合ったビルカまで帆走五日である。しかしもしス

コーネからイェート人の土地を通ってスカーラ、テーリェ、ビルカを経て陸行するならば、一か月を経て初めてシグチューナに到着する。

三〇章

アーダルヴァルトは福音を説く熱意に燃えてスウェーデンに来て短期間に、シグチューナとその周辺の全ての住民をキリスト教に改宗させた。彼はまた、スコーネのエギーノ司教と共に良く知られたウプサラと呼ばれる異教の寺院を訪れて、その地での彼らの働きでキリスト教に何らから成果をもたらすことができるかどうか確かめようということで一致した。彼らは、野蛮な信仰の中心になっている建物が壊されさえしたら、喜んであらゆる種類の苦悩に耐える意思があった。この家が打ち壊されるか焼け落ちる時にはその結果は直ちに全住民が改宗することになろうという神に仕える者の考えが民衆の間で拒否して語られるのを聞くと、かの信仰厚いステンキル王は巧妙な言葉でその考えを放棄させた。すなわち、彼らが直ちに死刑の判決を受けるであろうこと、王自身も悪人を国内に自由に入れたかどで追放されるだろうと言った。そうなれば、スラブ人の国で最近見られたように、現在信仰している者も全て再び異教に落ちるだろう。司教達は王の説に従い、代わりに、全てのイェート人の町を巡って異教の偶像を破壊し、それによって何千人もの異教徒をキリスト教徒にした。その後アーダルヴァルトが死去した時、我が大司教はその地位にラーメルスローのタディコを任命した。彼は腹を愛するあまり、外国で使徒となるよりは家郷で飢えることを望んだ。スイオネールの土地と彼らの宗教についてのこれらの資料は後に紹介する。

sk 142　アーダルヴァルト司教の随行者の何人かは、彼が初めてシグチューナに来た時、一回のミサを開くと銀貨七〇マルクが寄進されたと私に語った。北欧の全ての人々はそれほど信仰厚かったのである。彼はこの旅の間に機会を得て、ビルカを訪ねている。ビルカは今では放棄されて、町の跡も全く見ることができない。そのため、聖ウンニ大司教の墓も全く見付けられない。

三一章

ノルドラントは世界でも最も遠く隔たった位置にある土地なのでこれを私の書物の最後に置くのが適当である。この土地は現在ではノルウェーと呼ばれている。これまでに私がスイオネールの土地との関連で、この国の位置と大きさについて書いたので、ここでは特に、この国が北欧の最北端まで長く伸びていることを述べる。その名もここからきている。しかし、この国はバルト海と呼ばれる海に

突き出した岩山がその始まりである。その後この山地は北に向かって曲がり、荒れる大海の岸辺を巡って、リペアの山地で終わる。世界もまた緊張に疲れてここに終わる。ノルウェーはその荒々しい山岳地帯と酷寒のためにあらゆる国のなかで最も不毛で牧畜のみに適している。アラビア人がその家畜を砂漠の奥に放牧するようなものである。そしてノルウェー人は家畜のミルクを飲み、その毛を衣服に利用するなど家畜に依存して暮らしている。そのためこの国は勇敢な兵士を育てる。彼らは土地の恵みの豊かさの故に女々しくなることはなく、自分たちが誰かに悩まされる以上にしばしば、他を攻撃する。彼らは隣に住むスイオネールと良い関係を保って暮らしている。しかし、デンマーク人は例え貧しさは同じでも、罰を受けるのをあえて、時々彼らを攻撃する。飢饉に際しては、欠乏に迫られて世界中を放浪し、海賊行為によってあらゆる国から莫大な富を持ち帰る。彼らはこのようにして自分たちの国の貧困を凌ぐのである。しかしキリスト教を受け入れ、より良い教えを受けた後は、彼らは平和と真実を愛する事を知った。窮乏の時には、かつてのようにあちこちから物を集めるのではなく、彼らが集めた物を他人に配ったりさえする。最初は全員が破廉恥な魔法に身を投じていたが、今や、使徒の言葉によって無心にキリストにその罪を告白し、キリストに十字を切るのである。彼らはまた全人類の内で最も心満ちた人々であり、食物にせよ習慣にせよ、倹約と中庸に高い価値を認めている。更に彼らは牧師と教会を非常に尊重するので、出席する毎日のミサに供え物を持参しない者はキリスト教徒とはみなされない。しかし、ノルウェー人とデンマーク人は洗礼と堅信礼、献堂式と聖職授任などすべてに高い金を支払わねばならない。私の考えるところでは、これは牧師達の強欲の故である。野蛮な人々はまだ十分の一税を支払うこともできないしその意思もないから、本来、喜捨さるべきものが別の形で取り立てられるのである。従って、往診や埋葬に至るまで全てを金で買わねばならない。かくして私の聞くところによれば、彼らの高い道徳性はただ牧師の強欲によって破壊されてしまう。

sk 143　デンマークの彼方に住むノルウェー人が、フランク王国に住むノルウェー人の祖であり、この後者から新たに、アブリエンが第三のノルウェー人の集団を受容した。

sk 144　異教徒は肉体の復活を信じてはいないが、彼らの埋葬習慣について語るなら、彼らは古代ローマ人と同様に、死者の墓や葬儀に対しあらゆる尊敬を払っていることは記憶に値する。更に彼らは死者の金、武器その他死者が生前もっとも愛用したものを死者と共に墓に入れる。これは異教徒の古い習慣から伝わったことで、彼らの古墳では今でも自らの遺体と共にアンフォラその他の容器に入

れた財宝を墓に納めさせたものに出会うことがある。インドの住民についてもこのことが言われる。

三二章

ノルウェーとスウェーデンのあちこちに、ヤコブの子達のように、自分の手の働きで暮らす、家柄の良い家畜飼育者が住むところがある。ノルウェーの住民は遙か北方の海岸に住む者を除けば、全てよきキリスト教徒である。この北端の住民は今でも強い魔法を使い、全世界で個々の人間によってなされる事を全て知っていることで有名である。更に、彼らは強力な呪文によって大きな海の生き物を海岸に閉じ込めることができ、古来の習慣によって、魔術師について聖書に述べられているその他可能なことは何でも簡単に行ってしまう。彼らの到達し難い山中では、髭をはやした女がいるが、男達は森の中に住み、滅多に姿を見せないと聞いた。彼らは互いにしゃべる際は、言葉でいうより速く歯ぎしりするから近くに住む者でも彼らのいうことをほとんど理解できないという。ローマの著述家たちはこの山地をリペアと呼び、万年雪をいただく厳しい土地としている。スクリードフィン人は冷たい雪なしには生活できず、深い雪の荒野を野獣よりも速く走るとさえいわれる。この山岳地方には、猟の獲物が非常に多いので、大部分の土地では、森の獣だけに頼って生活できる。スイオネールの土地におけると同様、ここでは、ヨーロッパ野牛、野牛、大鹿を捕らえる。これに対し、バイソンはスラブ人の土地とロシアで捕らえられる。ノルウェーは黒狐、黒兎、白てんや白熊が住む点に特徴がある。白熊はヨーロッパ野牛と同じく水中に住む。我が国民にとってはもの珍しい、見るべきものがその他色々あるが、これらを根本から明らかにすることは、この土地の人々に委ねることとする。

sk 145　パウルス　ディアコヌスはロンゴバルド史で北欧の最も遠くスクリードフィン人の土地に、海岸の洞穴があり、七人の男が眠るように横たわっていると確言している。これについては色々な見解があり、例えば、世界の終末が近い時、世界の人々のためにそれを予言していると言い、また、一一、〇〇〇人の処女の何人かがそこに来て、その従者と船が山に埋められ奇跡が起こるのだとも言う。そこにはオーラフも教会を建てた。

三三章

ノルウェー人の最大の町はトロンネイムであり、今日ではその教会によって慎み深く装った町を多くの人々が訪れる。ここには、聖なる王にして殉教者オーラフの遺骸がある。その墓所のそばでは、今日でも主が著かな霊験を示される。それ故、聖人の御利益で救わ

れんとする者が遠い土地からも流れ込む。その巡礼は次のように行われる。もしデンマークのオールボーまたはヴェンデルから船に乗れば、一日でノルウェー人の住む町ヴィーケンに着く。そこから左向きに航海してノルウェーの海岸を進むと、五日めにトロンネイムという町に達する。デンマークのスコーネから陸路を遠くトロンネイムに達する道を行くこともできる。しかし、この道は山地のために長い時間を要し、危険も多いので、旅人はこれを避ける。

sk 146　非常に正義を重んじたオーラフ王はノルウェー人を初めてキリスト教と接触させた人物である。彼の息子マグヌスがデンマーク人を征服した。オーラフの神を信ぜざる兄弟ハッラルがオークニー諸島をその王国に編入した。彼はその領土をリペア山地やアイスランドまで拡大した。

三四章

ノルウェーの最初の司教として、イングランドからヨハンネスという人物がやってきた。彼は王を改宗せしめ、彼と民衆に洗礼を授けた。その後を継いだのはグリムキル司教で、当時、オーラフ王から大司教ウンワンへの使節であった。三番目がシグフリードでスウェーデン人、ノルウェー人の双方に予言を行った。彼はこれらの国の人々の間では同様によく知られた司祭とともにこの時代まで生きた。彼らの死後、我が大司教はノルウェー人の要請で、トルフをトロンネイムの司教に、またシグヴァルトを同じ地方の司教に任命した。アスゴートとベルンハルトについては、彼らが教皇によって任命されたことに大司教は不満であったが、彼らが罪滅ぼしをした後、彼らを引退せしめ贈り物を与えた。これらの人々によって、神の言葉は今日よりも多くの魂を克ち取って聖母教会は繁栄しノルウェーのあらゆる場所で大きくなりつつある。しかし、キリスト教はノルウェー人とスイオネール人の間にかなり遅れて取り入れられたので、現在でもどの司教座も明確な境界線を持っていないばかりか、王と民衆に受け入れられた全ての司教は共同で教会を建立し、国中を巡り歩き、できるだけ多くをキリスト教に導き、互いに嫉妬しあうことなく生きているかぎり民衆の道しるべとなっている。

sk 147　彼以前に我らの同輩リアフダーグ、オーディンカール、ポッポがこれらの民衆のために予言を行ったが、我々は働いたにも関わらず、この働きの報酬はイングランド人が受けたと言い得る。

sk 148　この人物が別の場所で任命されたマインハルトやアルベルトと共に大司教の元に来た時、大司教は彼らに贈り物を与えノルウェーとオークニー諸島で自らの代理とならしめた。

三五章

北欧で最も遠い土地であるノルトラントのかなたには、人間の住

む場所はなく、全世界を取り巻く果てもなく恐ろしい大海原だけがある。その海にはノルウェーに向かい合って多くの重要な島がある。それらは現在ではほとんど全てノルウェー人の支配下にあり、ハムブルク大司教区に入っていることもあって、私が看過するべきではない。まず蛮人がオルガーネルと呼ぶオークニー諸島がある。キクラデス諸島と同様、この島々も海の中に散らばっている。ローマの著述家マルチアヌスとソリヌスによれば、次ぎのように描かれている。ブリタンニアの彼方の果てしない大洋が開ける所に、オークニー諸島があり、その内二十は無人で十六は人が住む。オークニー諸島の島の数は約四十である。その近くにエレクトリード諸島があり、ここではこはくが採掘される。従って、オークニー諸島はノルウェー、ブリタンニア、アイルランドの間にあり、恐ろしい音を轟かせる大海を気にも止めず嘲るのである。ノルウェーの町トロンネイムから船で一日で到達できると言われる。オークニー諸島からはイングランドへもスコットランドへも航海は殆ど同じ距離である。オークニー諸島はかつてイングランドまたはスコットランドの司教によって導かれていたが、わが大司教は教皇の命によって、ビルギスヘラードの町にトールルフを任命し、彼が全部の島の面倒を見ることとなった。

sk 150　デンマークとノルウェーを隔てるブリタンニアの大洋については、船乗りたちが極めて注目すべきことを語っている。すなわち、オークニー諸島周辺の海は固く凝り固まった塩で覆われているので船は嵐の助けなしには動くことができないという。そのため、この海は我々の言葉で一般にレーベル海 (Lebersee) と呼ばれる。

*sk 151　このことは、この本の著者が南部ドイツ övre Tyskland の出身であることを示す。彼が一連の語と固有名詞を自分の方言に使おうとする時、我々には理解できなくなってしまう。

三六章

他の島から遙かに離れて大洋のただ中にあるチューレ島は殆ど知られていないと言われる。この島については、ローマの著述家も野蛮な民族もともに記述する価値があるという。彼らは、チューレ島は全ての中で最も遠くにあるという。そこでは夏至に太陽が北回帰線を通る時、夜が無く、冬至には昼が無い。これが六か月ごとに起こるというのである。同様にベーダは、ブリタンニアでは夏の白夜とは夏至の頃六か月にわたって連続して昼となり、太陽がへだたる冬至の頃には逆に夜が続くことを示すと書いている。マルセイユのピテアスは、これはブリタンニアから北方へ航程六日の距離にあるチューレ島で起こると書いている。

このチューレ島は大洋をつなぐ氷のために、今ではアイスランドと呼ばれる。この島についてはまた、その氷がその古さのために非常に黒く乾いて見え、点火すれば燃えるという独特の現象について語る者がいる。この島は非常に大きく、その地域内に多くの部族がいて、家畜の飼育のみで生活し獣の毛皮を着ている。そこにはいかなる穀物も育たず、木材は全く無い。そのため、人々は地下の穴に住み、屋根も食べ物も寝床も家畜と共用する。それ故、人間の生活は極めて単純で自然が彼らに与える物以外の何物も欲することはないから食べて着ることができればそれで満足すると、喜んで使徒に語ることができるのである。彼らは住む山を持ち満足できる泉を持っている。これらの人々をその貧しさの故に誰も嫉妬しないし、特に、今では全員がキリスト教を信じているので、彼らは幸福であると言いたい。

彼らの性格には多くの特徴がある。何よりも、あらゆる物を共有するという彼らの人類愛であり、これは外部の人間にも内部で生まれた者にも等しい。彼らの司教は彼らにとっては王である。全ての民衆は司教の命令に従う。彼が神の意思と聖書の教えと他の部族の状況の理解に合わせて決めることを、彼らはその法と考える。彼らのことに考えを致す時、この信仰を得るまでの彼らの生活方法が自然の正義そのものの法則によるがごとく、我々の宗教的な理解とさほど違わなかったにもかかわらず、彼らが大司教の時代に改宗したことに我らが大司教は心から神に感謝してきた。彼らの要請に応じて、大司教は非常に信仰厚いイスレイフという名の人物を司教に任命した。彼はこの国から大司教の下に送られ、大司教が自分の手元にかなり長く置き大きな名誉を付与した。この期間に彼は新しくキリスト教に改宗した人々に教える良い方法を学ぶことができた。彼の仲介で大司教は個人的な書簡をアイスランドとグリーンランドの人々におくり、その中で、彼らの教会に対する敬意に満ちた挨拶をし、皆が完全な喜びを共に分かち合えるように、早い機会にそれらの地を訪問する事を約束した。これらの彼の言葉から、大司教が自分の伝道の任務について抱いた非常に善なる意思を称揚することができる。使徒でさえも、実現できなかったとはいえ、神の言葉を説くためにスペインに赴こうとしたことを我々は知っている。これが、私が信頼すべき資料からアイスランドとウルティマ・チューレについて知ったことであり、純粋に物語的な細部は排除した。

sk 152　チューレはこの海のあらゆる島の内、最も遠くに位置する。この島については、ソリヌスが述べている……。

sk 154　ブリタンニアはあらゆる島の内、最大である。ここからチューレまで九日で航海できる。ここから凍った海まで一日の航海である。この海は太陽によって暖められることが全くないために凍

結している。

sk 155　デンマークのオールボー岬からアイスランドまで三〇日の航海であるが、順風ならば多少短いと言う。

sk 156　彼らの元には「罪を犯すのは恥なりまたはこの報いは死なり」とする法律があるのみでいかなる王もない。

sk 157　そこで際立って大きい町はスカルホルトである。

sk 158　アイスランドの近くでは大洋は氷に満ち、沸き立ち、霧が立ち込めている。

三七章

大海中には他にもおおくの島があるが、その内、グリーンランドは最小のものではない。この島は大海中、更に遠く、スウェーデンの山リペア山地の正面にある。ノルウェーの海岸からこの島までは、アイスランドと同様に、帆走五日から七日でこの島に達することができる。海水の故でこの島の人間は緑色をしており、ここからこの島の名が付けられた。彼らが海賊行為の故に残忍な非平和的な航海者であること以外は、彼らの生活の仕方はアイスランド人と似ている。この島へも近ごろキリスト教がやってきたと言われる。

三八章

第三の島はハロガランドである。この島はノルウェーにより近く位置するが、その大きさは他の島と比べて測り得る。ここでは夏至の頃、太陽は十四日間連続で地平線の上にあるが、冬にはこれと反対に同じ日数の間姿を消す。これは未開の人々には、不思議で神秘的なことである。彼らは、日の長さが変化するのは太陽の軌道の高低によることを知らないからである。地球が球体であることから必然的に、太陽はその運行に際して近づく場合は日光をもたらし、遠ざかる場合は夜を残す。夏至に太陽が昇る時には、北方に住む人間にとって昼を長く夜を短くする。しかし、冬至の頃に太陽が低くなる時には、同じことが南に住む人間に起こる。これについて知らない異教徒たちは、この土地は死者に対し不思議さをもたらすからこれを神聖な場所と呼ぶ。デンマークの王も、スイオネールの土地、ノルウェーその他この地域の島でこの現象が生ずると証言した者の一人である。

sk 159　他の者は、ハロガランドはスクリードフィンナナに近く位置するノルウェーのもっとも遠隔の部分であり、山岳と厳しい寒気のために近づき難いと言う。

三九章

彼は更に別の島について述べている。この島は多くの者によってこの大海中に発見されたが、素晴らしいぶどう酒が取れる野生のぶ

どうの木が生えているためにヴィンランドと呼ばれる。そこでは種を蒔かなくともパン用の穀物が豊富にあることを知ったが、これは過った報告ではなくデンマーク人達のつつましい話による。王が言うのには、この島の反対側には、住むことのできる土地はこの大海中に全く無く、そこから先は全て、通り抜けの出来ない氷に満ち、計ることの出来ない暗闇に覆われている。これについて、マルチアヌスは「チューレ島の向こうでは一日航海しただけで海は堅く凍っていた」と書いている。ノルウェーの王子であるハラルは広く旅をしたが、近頃、この島へ行ってきた。彼が自分の船で北の海の広がりを探求しようとした時、彼の目前に世界の果てが霧の中に霞んでいたので、向きを変えることで危うく大きく口を開けた深淵を避けることに成功した。

四〇章

記憶に聖なるアーダルベルト大司教もまた私に、彼の前任者の時代にフリースランドの何人かの貴族が海を探究するために北に向かって航海したと語られた。その理由はこの土地の住民がウェーザー川の河口から真っすぐ北に向かって行けば、果てしない大海があるばかりでいかなる土地にも出会わないと主張したからである。随行した者はこの不明確な話を解明すると誓いをたてて加わり、漕ぎ手に対しフリースランドの岸辺を離れるように、勇んで命じたのである。彼らは一方にデンマーク、他方にブリタンニアを後にして、オークニー諸島に到着した。この島を左に見て通過した後、ノルウェーを右にみて、長い航海の後に、氷に覆われたアイスランドに着いた。ここから彼らは海の波を切り裂いて北極に向かったが、彼らがここまで述べた全ての島を後にした時、彼らはその危険な旅を全能の神と聖讃悔僧ウィッレハードに託した。彼らは氷海で突然、人間の眼では全く見通すことのできない暗黒の闇に出会った。定まらぬ海の流れがその原始の神秘に満ちた始まりに戻ろうとするのを知り、今や全ての望みを失った不運な船乗り達は、ただ死のみを考えながら巨大な力で底知れぬ混沌……この深淵の割れ目を人はそう呼ぶ……の中に引き込まれた。全ての海の流れがこの混沌の中に消えてしまい飲み込まれまた吐き出されると見られる。これが潮流と呼ばれる。その時、その慈悲で彼らの魂を受けてくださるように神に求める他は何もできなかった。引き潮の強い力が僚船のいくつかを引きずり込んだが、潮流はその他の船を吐き出し遠く離して引き戻した。このようにして、彼らは神の助けで、目前に見た危険な海から一瞬の内に救われ、全力でオールを漕いで波に乗った。

四一章

彼らは危険な暗黒と寒気の住まいを逃れた時、全く予期せずに、

ある島に辿り着いた。この島は回り全体をまるで都市のように高い崖でとり囲まれている。彼らは見通しの良い場所に出るべく内陸に進み、昼日中に地下の穴に隠れている者たちを見付けた。この穴の入口には数え切れぬほどの黄金の壺や人間が貴重で高価と考える金属でできた品があった。船乗り達は、運べるだけの財宝をできるだけ手にして急いで船に戻った。その時突然、彼らは背後に、驚くべき大きさの、わが国民がキュクロープと呼ぶような人間の姿をした者が迫るのを見た。普通より大きい犬が彼らの前に飛び出した。犬共は船の仲間を攻撃し、その内の一人を捕らえて、忽ちこれを目前で切り裂いた。他の者は船に辿り着き、危険を逃れることができた。彼らが語ったところによれば、巨人達は大きな叫び声を挙げながら深い沖合まで彼らを追跡した。フリース人たちは幸運にもブレーメンに帰り着き、そこで彼らは事細かく全てを大司教アレブラントに語って救いに対する感謝の印を慈悲深いキリストと識悔僧ウィッレハードに捧げた。

四二章

以上とは別に一昼夜に二度現れる潮流について、ここで記しておくのが適当であろう。これは全ての人に大きな謎を供しており、原因が知られないこの現象に出会うと自然の秘密を探る研究家でさえも確信が持てない。マクロビウスとベーダがこの事柄について多少言及していると言われ、ルカヌスはこれについては何も知らないと告白し、各著者の間では論争と不一致が支配していて、全員の理由付けが理論を不確実なものとしている。私に関しては、予言者に従って次のように言っておけば十分である。主よ、主の御業は幾通りもの理からなるものではありません。主は全てを確かなものとして造り出されました。地球は主が造り出されたものに満ちております。そして更に、主は天であり、主は地でもあります。主は海の波を支配されます。主の正しさは海の深さのごときものです。全ては計り知れないものと言うのが正しい。

四三章

以上が、私が北方の諸国の特徴について見出し、謹んでハムブルク教会に報告するものである。これらの諸国には非常に豊かな聖なる奉納物があること、ハムブルク教会はその布教活動によってすでに数え切れぬほど多くの民衆をキリスト教に改宗せしめて教会が彼らの精神的中心になっていること、世界の果てまで布教が止まることはない事を知っている。異教徒の間にこれらの福音をもたらす伝道の使命は聖アンスガルによって始められたが、今日まで中断されることなく前進してきた。これは偉大なるアーダルベルトの死まで

およそ二四〇年の期間に亘っている。

四四章

聖グレゴリウスに言及するにも、彼らのやりかたで歯ぎしりする以外になにもできなかったデンマーク、ノルウェー、スイオネールの蛮族が神のためにハレルヤを歌うことを習って久しいのを見ることができる。かつてゲルマーニアとガッリアの全ての州を掠奪したと書かれているこれら海賊であった人々が、いかに彼らの土地に満足し使徒について語るかを我々は知っている。ここでは、我々は現実の都市を持つのではなく、未来のあるべき都市を求めるのである。私は、今生きている者の土地に主の善を見ることができると信じている。我々はその偶像崇拝のために常に近づき難く「スキチアのダイアナの祭壇のごとく残忍」であった奇怪な土地が、今やその本来の野蛮からは程遠く至る所に布教のための道を整えんと競い合うのを見ることができる。また、偶像の祭壇が取り壊された後に全土に教会が建てられ、キリストの名が皆によって称揚されるのを見ることができる。この変化は間違いなく至高の右手によってなされ、全能の神の言葉が大変速く広まったので、日の出から日の入りまで、北でも南でも、主の御名は称揚され、全ての言葉で、神、父の栄光とその至高の精神で永遠に生き永遠を支配する主イエス・キリストへの信仰を告白した。

アーメン

注

(1) ブレーメンのアダム「北欧諸島誌」については、人文学論集第九・十集で、前半を訳出した際に、冒頭で簡単に解説した。参照されたい。